

令和2年度第3回奈良市総合教育会議 会議録		
開催日時	令和2年12月22日(火) 午前9時から午前10時まで	
開催場所	奈良市役所 中央棟地下1階 地下会議室	
協議題	奈良市教育大綱について	
出席者	構成員	仲川市長、北谷教育長、都築教育委員、畑中教育委員、柳澤教育委員、梅田教育委員
	事務局	【総合政策部】真銅総合政策部長、谷田総合政策課長 【教育部】立石部長、増田次長、廣岡次長、吉田教育監、石原センター所長、山田教職員課長、伊東学校教育課長、垣見教育支援・相談課長 【教育政策課】小林課長、五味原課長補佐、小林主任、岡田指導主事
開催形態	公開(傍聴人3名)	
担当課	教育部 教育政策課、総合政策部 総合政策課	
<b>議 事 の 内 容</b>		
仲川市長	<p>* 第1回総合教育会議で「どのような子供を育てていくか」「教師の役割」「これからの学び方」をテーマにご議論いただき、教育大綱の3つの柱について事務局で整理を行った。これまでの議論も踏まえ、一部加筆修正等させていただいたので、改めて皆様方にご議論をいただき概ね整理を行い策定に向けていきたいと思う。</p> <p>* また、再来年開校する一条高等学校附属中学校についても既に皆様方からご意見をいただいているが、これからの新しい展開につきましてもご意見をいただきたい。</p> <p>* まずは、前回からの教育大綱の変更点について事務局から説明をお願いする。</p> <p style="text-align: center;"><u>教育政策課長：事務局説明</u></p>	
仲川市長	<p>* 柱3について、非認知能力という表現は教育の分野ではある程度認知度が高いものかと認識していたが、少し伝わりにくい部分があるのではないかという意見があった。「〇〇教育」や「〇〇力」という言葉は、時間が経つと陳腐化してしまうこともあることから、「人間力」という表現に落ち着けている。スペースの関係もあり限定した字数で表現しているが、実行段階に移していく中では背景等を含めて丁寧に伝えていく必要があると考えている。</p> <p>* 今日の議論のポイントとしては柱3になるが、それ以外の所も含めて、皆さんからお気づきの点等、ご意見を賜りたい。</p>	
柳澤委員	<p>* デジタル化の下での学校教育は、おそらく近々の課題だと思っている。新しい時代が変わる過渡期がこの5年間かと感じている。</p> <p>* 個別最適化については、その考え方を教員が実感を伴って理解されているかが大事だと思う。いわゆる個別最適化と協働の学びは、個別と協働というのがもうひとつのデジタル化というプロセスの中で大事だろうと思う。決して協働というものはデジタル化というものと切り離されたものではない。そのあたりが教員や教育の方針で統一的に理解されているような気がした。</p> <p>* 柱3の表現について、「人生を豊かにする主体的な学び」と人間力を育む教育の充実</p>	

の繋ぎをどう整理されたか分からない。柱 1 と 2 では「〇〇のために」となっている。文言の統一だけ気になった。

都築委員

- \* 社会が非常に複雑化し、世界的に色々な課題がある中で、社会教育や学校教育、また地域作り等の様々な分野でも課題があり、それが、教育分野で新しい教育概念や教育方法が次々と出てきていることの前提にあるのではないかと思う。そこについては丁寧に整理し、どういう事をやるべきかを見定めていくことが非常に大切だと思う。
- \* 柱 3 の主な取組の中に PBL 教育や GRIT、Arts-STEM といった新しい言葉が明記されているが、何を指し、どのように説明していくのかを丁寧にやらなければならない。PBL とは、自ら課題を発見し、課題解決する過程の中で知識や経験を得ていく学習方法という意味だが、実は子育てにも似たような体験がある。子どもが出来ない事を「こうしてみたら」、「失敗したならもう一回やればいいよ」と家庭の中で身近に行ってきた。新しく特別な言葉ではなく、とても身近な事であることに気付けると思う。つまり新しく見えるような教育を一般市民、保護者、先生方に理解してもらうためには身近なものとして捉え、実はこれもそうだという示し方が大事なのではないかと思う。
- \* また、柱 3 の主な取組「人生成功の鍵 GRIT の育成」について、一生を通してみれば人生において成功も失敗もあるかと思うが、幼、小、中、高の間の育成の柱の中に人生の成功と本計画に明記するのは不似合いなのではないかと思う。確かに成功とは自分が計画した事、目的を達成できた事ということだと思うが、一方で、一般的には何かを成し遂げた事や社会的地位を獲得したといったニュアンスで使われるのではないかという気もした。人生成功の鍵とは将来を切り開く鍵や未来を切り開く鍵等、どういう言葉が適切か皆様方の意見も聞かせていただきたい。

畑中委員

- \* 今後の教育において重要となる個別最適化された学びや探究学習は、主な取組の中に明記されている。子どもが 100 人いたら 100 通りの学び方があるように多様な学びが今後必要になる。
- \* 柱 3 の教育を通して人生をいかに豊かにしていくかについて、主体的な学びとは子供がいかに自分のこととして主体的に考え、周りの大人も子供を主体に考えるのが大事だと思う。子供のやりたいことを拒否し、標準通りに収めようとする保護者的な考えもある。子どもがしたいことよりも親が何を求めるかを優先してしまい進路を選択していると思う。今後、教育においては子どもの成長を考えたときに足りない部分に目を向けるのではなく、得意分野をいかに伸ばしてあげることが出来るかが大事であり、そのことが子どもの生きる力になるのだと思う。正解の枠からはみでないように間違いないようにしていくのではなく、ゼロから新しく創り出す創造性や、枠からはみ出ようとする力が評価されるような教育が求められていくのではないかと思う。
- \* 主な取組にある PBL や GRIT は聞き慣れない言葉かと思うが、子どもの教育が学校教育だけではなく家庭教育、社会がいかに関わるのか教育大綱を通して、改めて認識

できればと思う。

梅田委員

- \* 前回の総合教育会議において、大きな枠組みについての方向性が共有認識できたと思う。全ての教育の場に対して横軸を刺しているような影響を及ぼすことになるであろう柱 3 を設けていることが、今回の教育大綱の大きな特色であるという議論であったかと思う。
- \* 奈良市の教育において育むとは何かをより分かりやすく示すという事、また、非認知能力を分かりやすくするという意見を受けて、人間力という言葉で集約していただいたと思うが、人間力という生涯に影響を及ぼす力を育成していくことが特色とも捉えられる。限られたページの中で、主旨が明らかに伝わっていくことが大切であると思う。例えば 3 つの目指す子ども像について、将来どのような人間力に繋がっていくかが垣間見える記述があれば、人間力に向けた考え方を示す事になるのではないかと考える。自ら学ぶ子であれば、「自由でユニークな発想ができる子どもを育てます」、「将来人生の岐路に立った時に自分の知識やスキルを総動員して何かを作り出していこうとする力をもった子ども」という将来のどのような人間力に繋がっていく子どもを目指しているかが、この限られた文言の中に示されていると、その後の柱の組み立てについてもつながりが生かされていくのではないかと考える。
- \* 3 つの育成の柱は、目指す子ども像に向けて育てていくために必要となる柱を柱 1 に教育環境について、柱 2 に教育支援体制について示しており、柱 3 にはどのような学び方が必要かということであり、柱 3 は柱 1、柱 2 にもすべてに関わってくるという前回の議論ではなかったかと思う。そう考えたことが、大きな意味を持つ言葉である「人間力」と打ち出されていることも含めて、様々な立場の方に伝わる説明が必要かと思う。どのような立場の方にも繋がっていく大綱となってほしいと考える。

教育長

- \* 育成の柱 1 は個人の学び方について、柱 2 は多様性について、柱 3 は生涯に渡って総合的に学ぶということがしっかりと整理されていると思う。
- \* 育成の柱 3 の主な取組にある「人生成功の鍵 GRIT の育成」の人生成功とは、自分の目標やその人自身の達成や目標を成功と表現したが、都築委員のご意見のような意味合いも出てくるのだろうと思う。

仲川市長

- \* 柳澤委員のご意見にあった個別最適化と協働型について、相反するものではなく両方併存するものであり、ハイブリッドであるという認識は重要な点で、特にデジタル化＝ドライなものというイメージを伴ってしまうが、決してそうではないより人間が必要な作業や余計な労力をとっばらい、人間性あふれる教育を実現するためのデジタル化であるという事について、しっかりと伝わっているかどうかは大事だと思う。例えば協働の学びの部分が PBL で表現されており、「他者と協働」と表現しているが、協働学習の協働は共に働きではなく Co-work の意味のキョウドウかと思う。この表現についても確認いただきたい。
- \* 都築委員のご意見にもあったように PBL、GRIT、Arts-STEM と最新の言葉が並んでおり、身近な言葉として受け止められるのかという事にも繋がると思うが、ここは

どうしてもコンセプチュアルな表現になりがちである。ストーンと落ちるように伝えないと、新しい代わりに冷たいものみたいなイメージになりかねないと思う。事務局はどう考えているか。

事務局

\* 学校で学ぶ教育や子どもの学びというのは柱 1 に書き込んだ方がいいと思う。柳澤委員がおっしゃった個別最適化と協働が対になっていることを表現できたらと思う。

仲川市長

\* 「個別最適」が具体的にどういう事を指すのか補足する資料を作成しないのであれば、教育振興基本計画ではもう少しブレイクダウンして、なぜそれが必要かデータ等で補足できると良い。そのことを前提として、都築委員がおっしゃったように急に出てきた概念ではなく今までも教育の分野、教育の分野を超えた分野の中で、既に議論のあったものである。若しくは子育てや身近な生活の中にそういった要素が実はあるのでそこを頭の中で繋げることができればよい。

都築委員

\* 言葉の整理はきちっと行うべきだと思うので、言葉の定義付けをし、教育振興基本計画にも対応していればよい。

\* 例えば家庭教育の場面や放課後子ども教室、社会教育、公民館活動と PBL 教育や Arts-STEM、GRIT に結び付く書き方をしていけば、読み手にもしっかりと伝わるのではないかと理解した。

仲川市長

\* 頂いた意見も踏まえて最終、整理を行いたい。

\* また、梅田委員のご意見にあった目指すべき子ども像と育成の柱を示すのに関係図で繋いでいくような見せ方の工夫ができるかなと思う。

\* 都築委員のご意見にあった人生成功の鍵という表現については、著作権があるのか。成功っていう表現がなかなか難しいと思う。

都築委員

\* 梅田委員がおっしゃったように、目指す子ども像が将来どういう生き方をする人を目指すのかが見れば、それが人生成功という言葉に結びついていくと思うが、ぱっとここだけ出てくると違うような気がした。

\* 子ども達はその力をつけることでどういう生き方ができる人間に成長するのかまでが見えて初めてここにある人生成功の正しい意味、こちらが伝えようとしている正しい意味が理解できるのかと思うが、これだけだとやはり捉え方によって伝わらないのではないかと危惧をしている。

仲川市長

\* 柳澤委員に質問ですが、大学であれば社会にでる一歩手前の教育課程ということもあり、授業の中でも出てくるイメージがあるが、小中学生を対象とすることを考えたときにどんな表現がいいと思いますか。

柳澤委員

\* 幼、小、中、高も対象になると思うが、おそらく人間力の基礎という意味合いでは

ないかと思う。大学では社会人基礎力を養い社会に送り出す。高校卒業段階ないし中学卒業段階の到達目標として、「人間力を育む」という表現にするのか、「人間力の基礎を育む」とするのか、その時に人生成功の鍵というのが中学生、高校生の段階で見えるのかということと不安がある気がする。

仲川市長

- \* このことについては畑中委員の、親が閉じ込めてしまうのではなく子ども中心の子ども優先の選択肢、判断をしていくべきだというご意見については、社会人基礎力、どう生きるのかということところにも繋がると思う。
- \* 大学という存在を全く無視しているわけではないが、奈良市としての教育大綱がいかによりよく生きるための力を身に付けさせるのか、それが奈良市の中学校や高校を卒業した後の高等教育のステージに行った子どもにはどうそのメッセージをバトンタッチしていくのか。場合によってはもう少し実学的な事を身に付け社会に出て、社会に出てからも更に学びを止めない、学びを続けていくのだと思うが、タイムラインをどこまで設定するべきかについては、どうですか。

教育長

- \* 一条高校の出口を視野に見ている。そこまでを含めたときに高校生を人間力の基礎までの段階とするのかについては、事務局内でも議論を行った。難しい表現だから削ろうかという作業は非常に簡単だが、どう現場に落とししていくのか、これをしっかり分かってもらう努力をしなければならぬ。教育大綱を基に教育振興基本計画を作成し取り組んでいくことになる。このイメージがいいかと思う。

仲川市長

- \* キャリア教育の中で社会人基礎力という言葉は中学生にとってイメージが持ちにくいと思う。
- \* 柱 3 の「人間力を育む教育」と、主な取組にある「人生成功の鍵」という表現をどうするのかについては、もっと伝わりやすい表現があれば考えるということによろしいか。

梅田委員

- \* 高等学校段階までの教育で担っている「人間力を育てる」ということは、人間力の基礎を培うということだと思う。今の社会情勢の中でも人生 100 年時代に生きる子どもたちを育てる事を考えたときに、社会で生きていくための人間力をこの段階において育てることは必要なことであり、基礎という言葉を入れなくても包括した捉えはできるのではないかと思う。

仲川市長

- \* 人間力である程度言葉は通じるのかなというご意見でしたので、そのようにさせていただきたいと思う。他に教育大綱についてご意見等ありますか。
- \* それでは、次に一条高等学校附属中学校について議論していきたいと思う。昨年 7 月の教育委員会会議において附属中学校の設置について議決いただいているということで、内容についてはご理解いただいていると思っている。どういう中学校を目指すのか、具体的なカリキュラムや教育方針、受験スタイル等、詳細を詰め

ていくべきところがある。附属中学校を設置することが単に附属中学校の中にとどまることなく、中学校世代の将来展望を念頭に置き、議論を深めていければと思う。

柳澤委員

- \* 12月の附属中学校説明会はオンラインでの開催となり、保護者や子ども達から質問を受け実際に学校を見ながら説明を聞くことはできなかったのが、次回の説明会に期待をしたい。
- \* 教育大綱の目指す子ども像を探求学習の中で評価した学習と共にそれを繋ぐような形に位置づけてほしい。そのことが奈良市の中学校にとって大変役に立つ、貢献できる意味合いが深いと思う。
- \* 奈良市では初めて6年間の中高一貫教育を整えることができる。新しい学習スタイルがデジタルでサポートされることになるが、学習指導要領という6年間の評価が詰まっている中で、高校の教員や新任教員にとって最も大きな課題、苦勞したところが結果としては、市内の中学校の教員に大きな影響を与えることになる。ニューフロンティアで頑張ってください新設中学校に期待している。

都築委員

- \* 附属中学校の学校ビジョンや目的、目指す生徒像は教育大綱の目標や目指す子ども像と一致しているので、市立学校の方向性は同じであることは確認させていただいた。
- \* 附属中学校のオンライン説明会の中で入学適性検査Ⅱの例として算数の問題に触れているが、この問題内容は、一条高校附属中学校に来てほしい子どもの姿を現しており、自分で確かめる姿勢を持つ子どもや粘り強く続けて取り組む子どもを期待しているのだということが見えて、非常に分かりやすいと思う。
- \* 一方で、一条高校の建学の精神であるフロンティアスピリッツを土台としてどのような学校ができるのか期待しているが、校風や学校の雰囲気というのは、教師と生徒とみんなで作っていくものである。子どもをどう捉えるか話し合っていたきたい。子どもは成長途中であっても信用すれば大人には無い力を発揮するものである。教師の持つ子ども感、大人の子どもの感は多様にあると思う。どのような学校を作っていくかというのは非常に大きい話である。新しい風が奈良市の全ての中学校に届けばいいと思う。

畑中委員

- \* 目指す生徒像に、やりたい事とことん探求する生徒とある。中学校でも様々な場面で経験、体験できる機会があると思うが、芸術やスポーツ等プロの世界を見て感じるという事はすごく大事だと思う。多くの情報が配信され身近に感じるができるようになっており今の自分と比較しやすい。例えば3Dプリンター等のICTを利用することにより、新たに生み出すこともできる。将来やりたいことに向かって、最短で進んでいくこともできると思う。その過程が一条中学であり一条高校であれば素晴らしいと思う。
- \* 生徒の行動力が発揮できる学びによって個性を伸ばす教育と、多様な社会で活躍することが上手くマッチングできる環境が一条中学や一条高校にあればいいと思う。一条中学の学びが他の市立中学にも還元され、普及して欲しい。

\* 「卒業後の進路は国公立か私立どちらを考えているか」という質問もあったようだが、一条中学、高校で学んだ生徒が自分のやりたいことのために学部を選び目標を持って大学に進学すると思う。大学受験に合わない優秀な生徒にとって、卒業後に魅力あるキャリアが見えてくるのがあっていい。卒業の出口が民間企業という選択もあっていいと思う。期待を込めて伝えたい。

梅田委員

\* 附属中学校の教育活動の柱が示されているが、これは教育大綱にある育成の柱で述べられている内容が特色ある教育活動の柱と重なることを確認したい。教育活動を具体的に落としこむ時に高校入試が無いことにより、6年間の系統性を持った特色あるカリキュラムとして探究活動が設定されている。設定科目に挙げている「探究フロンティア（仮称）」を学校の先生方が自分ごととして受け止めながらどのように指導するかを自覚することがとても大切だと思う。

\* 学びを進めていく上においては、人間力を身に付ける学び方が必要であり、教育大綱の育成の柱3に沿った内容であることを期待している。

\* そのようにして見えてきた学び方は、出口に入試があることにより、特色ある教育課程を打ち出すことができる。これまでの学び方を変え、「教え」から「学び」という学びの転換を図る新しい教育課程を用いながら具体的な姿を見せることが附属中学に求められる大きなところかと思う。

教育長

\* 22番目の中学校が単に出来たということではなく、6年間の強みを生かしたカリキュラムが中学校1年生から高校3年生までが同じステージで学ぶという姿を作っていきたい。

\* 子どもの学ぶ姿については、教員の役割が変わりどんな姿で子どもの学びを行うのか作り上げるのと同時に、高校の教員と中学の教員が交流を行い、学習の中身を作り上げていくと思う。

\* 社会の力も総動員する部分を含めて、開かれた教育課程を組み入れていかないといけない。探求的な学習も含め、社会の力も借りながら教室と社会が繋がっていることを認識し、もう一度新たな一条高校を含めて再生、改革を進めていきたい。

仲川市長

\* 附属中学校が単に22番目の中学ではなくて、今後の市内の中学校のモデルケースになる必要がある。6年間の系統性を持たせることができるという強みも教員自身が理解をして、同じことをやるのではなく、自らが教え方ではなく学び方をどう捉えなおしをするか教員側の力も変革を求められていることかと思う。

\* 教育大綱については最終頂きました意見をもとに整えさせていただいて、オンライン等で委員の皆さん方には共有させていただく形になろうかと思う。主だったテーマは概ね完了したかと認識している。ご協力ありがとうございました。